SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

静岡の新方言と標準語の普及過程

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学言語学研究会 公開日: 2022-03-28 キーワード (Ja): 静岡方言, 新方言, グロットグラム, 言語景観, 方言イメージ, 県民所得 キーワード (En): 作成者: 井上, 史雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028819

静岡の新方言と標準語の普及過程

井　上　史　雄

キーワード：静岡方言、新方言、グロットグラム、言語景観、方言イメージ、県民所得

1．静岡県は日本の縮図

静岡県は日本の縮図と言われる。産業構成、人口構成が日本全体と似ていることによる。また先取精神に富むことから、新商品のテスト、テストマーケティングで、試売品の舞台になる。静岡県は方言の東西境界をなすだけでなく、地質でも、文化的にも東西日本のはざまにあり、日本全体を反映する。食品をはじめ民俗事象でも東西境界をなし、例えばインスタントラーメンの味付けやうなぎ蒲焼の焼き方が静岡県のあたりで違いを示す。

一方「ぎあ方言」(岐阜愛知）に対する「なやし方言」(長野山梨静岡）には共通性があり（都竹1949)、京都・東京の影響を受ける事象と受けない事象とがあり、東北・九州と並んで「中距離遠隔分布」「三辺境分布」を示すこともあり、中世の面影を残す（山口1982)。

2．新方言の傾向

日本の言語地理学の研究は1960年代から盛んになり、『日本言語地図』(LAJ）刊行を機に地域ごとの方言地図が作成された。しかし柴田武の『下北言語地図』や『瀬戸内海言語図巻』（藤原1974）などの年齢層別の地図刊行の影響は少なく、高年層の調査だけが行われた。『図説静岡県方言辞典』(静岡県方言研究会他1987）も同様である。若い世代で非共通語化が報告されても、例外扱いされるだけだった。その後世代差を含むデータへの多変量解析法適用により、１群のまとまった事象「新方言」ととらえられた（井上2008)。

新方言の研究は1980年代から盛んになった。実例を多く集めてみると、一定

の傾向が見られる。知的要因としては、文法的類推による合理化など、言語的な経済性が観察される。また遊戯語・児童語における多様性が見られる。一方情的要因として、対人配慮表現politenessに関わる要因があり。ジャネ、ッスなどの新生が見られ、強調表現（バリ・メッチャ・チョー）などで各地での必要に応じた普及が観察される。

東海道グロットグラム改訂版

新方言についての静岡の位置は、東海道グロットグラム（Q調査[1]）で、地域差と年齢差を１枚の図に示すことにより、考察できた（井上1991）。その図は技術的に初期のタイプで、地点も年齢層も一定間隔で並べて出力したものだった。後に半沢康により、年齢を１年ごとに細かく分け、かつ駅間距離も忠実に表現したグロットグラムが出力された。これにより、動態が忠実に表現・反映され、新方言の抽出が確実になり、信頼できる推定ができた。

以下に示すグロットグラムでは、左が高年層、右が若年層、上が東、下が西で、静岡付近だけを取り出した[2]。

ソージャン　山梨から静岡へ？

まず新方言伝播の実例として、有名なジャンを取り上げる。**図１**に見るように、静岡県全体に分布するが、富士市周辺には高年層にも●が集中分布し、△（聞く）の少なさから見て、県内の伝播の中心と推定される。文献などからジャンの発祥地は山梨県と見られ、富士川、身延線沿いの伝播と見られる[3]。

一番古い文献記載は「風俗画報」明治38（1905）年「甲斐方言考」で、以下のように記す。

「ジヤン　ソオヽヽヽ、イヽヽヽヽはジヤナイカと云ふに同じ　處によりてはジヤンと云はずしてジヤァともいへり」(三田村1905)。

100年以上前の記述で、文例は「ソージャン、イージャン」と読み取れる。山梨県ではジャンの用法が広い。「おれが行くじゃん（おれが行くよ)」のように、意志表現にも使われる。また「見るじゃんの丘」が山梨県にあるが、勧誘の「見

---

[1] 実地調査は1986年に開始した。関西（Quansai）と関東との東西差に関心を注いだために、中間地域の方言差への配慮は不十分だった。また『図説静岡県方言辞典』は刊行が1987年で、途中で項目を増やすことができなかった。

[2]「庄内浜荻」データ（井上・半沢2021）では、単純化グロットグラムを作図し、地理平面を鉄道距離により１次元化して、読み取りやすくした。

[3] 江端（1999）でも山梨県と静岡県は連続分布を示すが、身延線沿線は調査地点が欠ける。

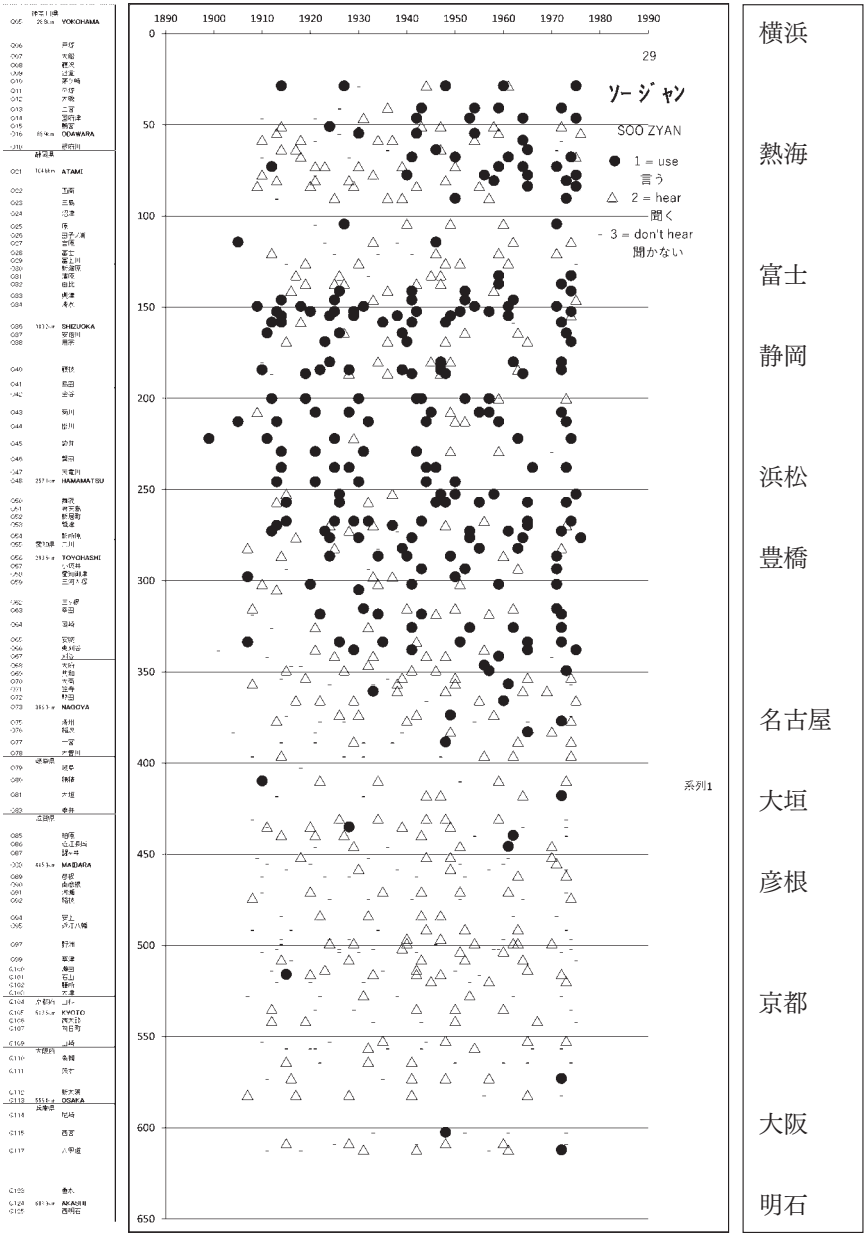

図１　東海道のジャンの伝播

よう」の用法と地元民には理解されている。用法の拡大と使用年数の比例関係から考えて、山梨県が発祥地ととらえてよい（井上1998）。

江端（1999）の地図でも、山梨が一番早く使った地と見られる。使用開始時期についての記憶時間に関して、「昔から、子供のころから」が、山梨県・静岡に多い。その後については、中学生と保護者の全国調査があり、中部地方から全国に広がった。

後述のように、「ない／ん」により静岡山梨両県は二分される。併存地域では「ない／ん」の文脈による入れ替えが起こりやすく、「ではないか」は「じゃないか」「じゃんか」に変化しうる。

なお伝播の順番については諸説があり、「三河のジャンダラリン」（**図２**）という言い回しがあるほど三河では地元の特色ととらえている。しかし幕末の「ええじゃないか」というお伊勢参りの民衆運動が反例になる。三河の豊橋発祥とされている「ええじゃないか」（**図３**）は「いいじゃん」の前身にあたり、幕末に「いいじゃん」は生じていなかった証拠になる。三河のジャン・ダラ・リンは、すべて近代以降に出た新しい言い方で、江戸時代以前の高年層は使わなかったと見られる。

『東京・神奈川言語地図』（井上編1988）で見ると、ジャンは飛び火の形で横浜へ伝わり、（300万都市になったという背景もあり）「浜ことば」の評価が上がり、のちに東京に流入した。さらに「いいじゃん」は全国に普及した（文化庁2001）。

愛知県（三河）の新方言

図２　「三河のジャンダラリン」

図３　豊橋のええじゃないか

他地域の対人調節表現　「ヤンカ」「シナイ」

ジャンの発達・伝播と平行的な事象として、ジャンカ、ヤンカがある。中間地域を飛び越えた亀山へのヤンカの飛び火（服部1956、楳垣1962）は似たプロセスである。

ジャンは、伝達内容・知的事実の外側にあり、聞き手との交渉、対人調節表現、モダリティーに関わる。同様に「～シナイ」が松本に広がったが、近郊松代の「ま抜けことば」を遠因とする解釈がある。かつて「行きましない・行きました」などが「行きしない・行きした」と言われていたことから、用法が派生したという説明である。

「ジャネ」の進出

21世紀には東京圏の若者における「ジャネ」の進出が見られた。語源としては、「ジャナイ」のアイ連母音の融合・短縮による。「ジャネカ」の「か抜き」の可能性もある。中部地方から受け入れた「ジャン」を関東方言風に変えて受け入れた可能性もある。

このように確認表現・推量表現で新しい言い方が発生した。現代の敬語はポライトネスなどの枠組みも視野に入れ、待遇表現として広く扱われるが、その守備範囲に入る現象である。

（ッ）ショ

（ッ）ショは同じ確認表現・推量表現で、100年以上の歴史がある。北海道起

源の東京新方言と見なされる。ドラマなどで北海道方言として用いられたおかげで、道民も方言と意識するようになった。千葉県木更津市には新日鉄の工場移転による大量移住に伴って広がった。今都区内に広がり、静岡市でも広がっている。茨城県日立市でも使われる。転勤者の子供が飛び火の形で広げた可能性がある。

ら抜きことばの千年

ことば論議で話題になり、全国に広がる「ら抜きことば」も地方発祥で（井上1998）、発祥地の愛知県では、江戸時代の用例が見つかった（三宅2019）。発生の原因と普及のメカニズムには諸説があるが、「られる敬語」との区別のため、混乱を避けるために、広がった面もある。関東では「られる敬語」の神奈川先行が見られる。「社長は食べられました」は理論的には多様な解釈が可能である。

ら抜きことばの普及した地域では他の変化も生じた。**れ足すことば**（読めれる、見れれるなど）は愛知県が先行し、静岡へ進出した。GAJ『方言文法全国地図』によれば高知でも使われ（**図４**）、多元発生と見られる（井上2003）。100年以上の歴史がたどれ、全国中学調査では、全国各地に広がっている（**図５**）。

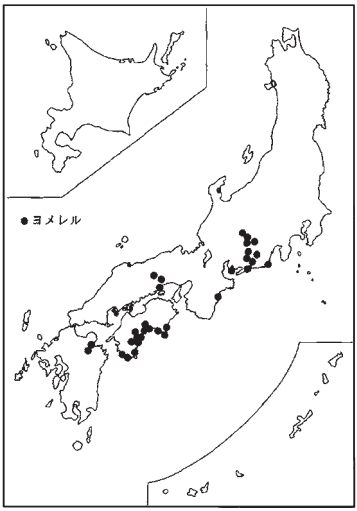

図１－10 「読めれる」全国の老年層の分布（『方言文法全国地図』1910年前後生まれ）
『方言文法全国地図』（GAJ）174図「電灯が明るいので新聞を読むことができる」による。

図４　れ足すことばの多元発生

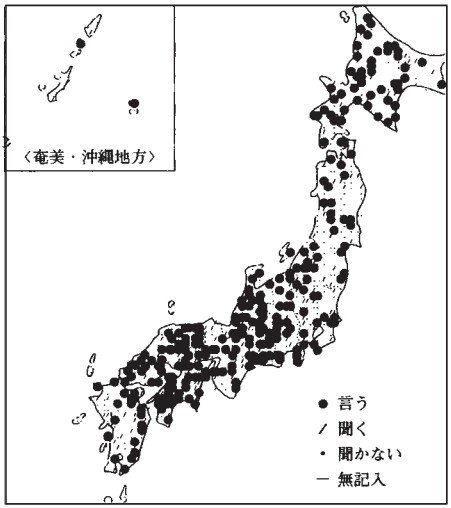

図１－12 「飲めれる」全国の中学生の分布（1970年前後生まれ）
中学校を通じての通信調査による全国分布図（1983年調査）。「今言う」

図５　れ足すことばの全国普及

NHKによる全国調査もある（塩田2022）。

また**さ入れことば**（書かさせていただく、など）も、ら抜きことばがすでに進出した地域に普及しつつある。

３．静岡県の地方型新方言

新方言の全国型・地方型の違いが佐藤（1994）により指摘された。以上は全国型で、東京にも普及した新方言の例である。以下では地方型を扱い、静岡県に焦点をあてる。新方言から見ると、「チョー、ッショ、ダラ（だろう）、アルラ（あるだろう）」などのように、静岡県がいち早く取り入れ、周囲に広げた言い方がある。各種の全国調査、東海道沿線の方言調査から実証される。

シン（しない）

図６のように、シン●（しない）は、静岡・浜松間で広がっている。かつての方言「セン」と共通語形「シナイ」の混交から生じたとも言え、「する」の（スル以外の）語幹をシに単純化する内的な動因によるとも言える。名古屋付近でも生じているが、共通語との接触の多い地域で先行したとも言えるし、内的要因による多元発生とも言える。否定表現についての近畿の「てへん」の発生も勘案されるべきである。

『図説静岡県方言辞典』p.750によれば熱海から静岡市までは動詞行くの否定はイカナイで、藤枝から新居まではイカンまたはイキャーセンである。土川（1948）、馬瀬（1977）以来興味を引いている東西方言境界だが、線の西でサ変動詞に変化が起きている。

アルズラ→アルラ

「～ズラ」は長野・静岡・山梨などに分布しており、諸説あるが、古語の「にてあらむ」に由来すると言われる。分析的な表現ダラが静岡県内に見られるが（**図７**）、長音を伴った「ダラー」があることを見ると、共通語形「ダロー」との混交と解釈される。一方「ラ」も使用され、「アルズラ → アルラ■」が若い人に拡大した。静岡県一帯ではズラ、ダラ、ラなどに使い分けがあるとされる。

『図説静岡県方言辞典』p.748によれば「降るだろう」におけるフルラの分布は沼津から新居まで広く、フルズラと併存している。図７と比べるとフルラの進出が読み取れる。

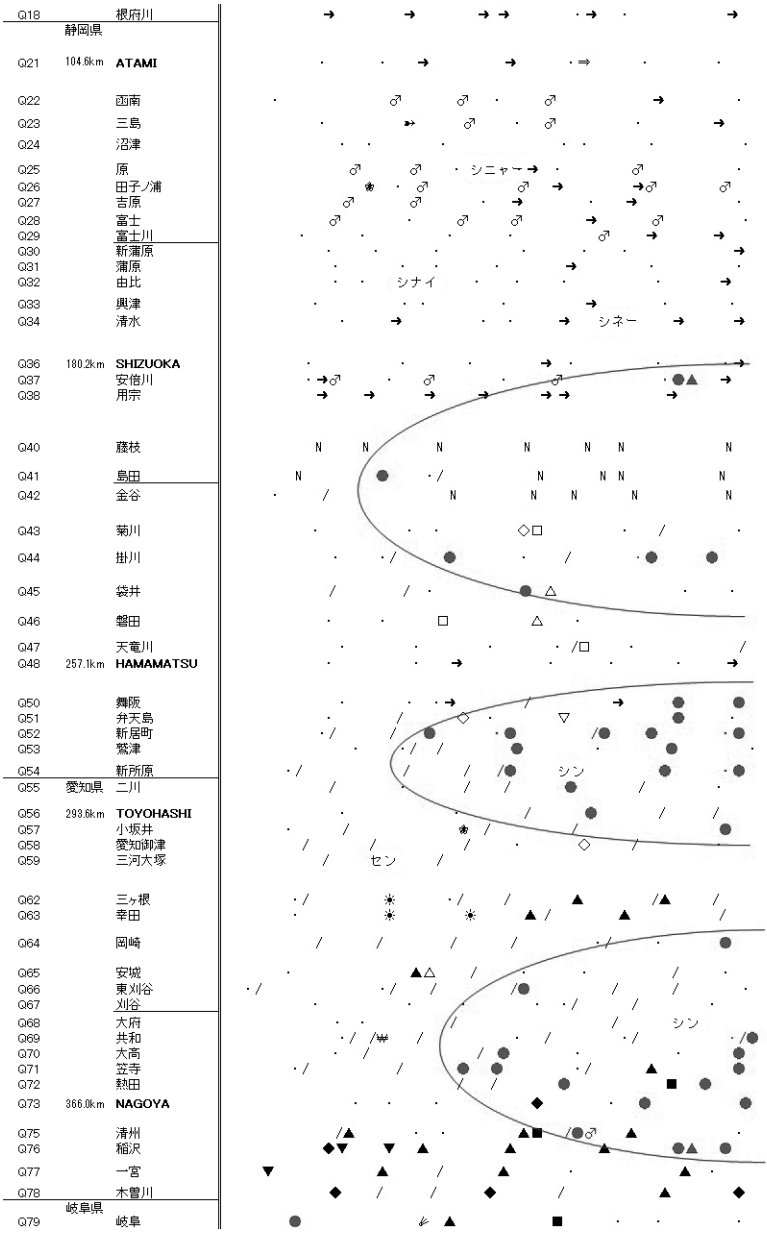
Q18 根府川
静岡県
Q21 104.6km ATAMI
Q22 函南
Q23 三島
Q24 沼津
Q25 原
Q26 田子ノ浦
Q27 吉原
Q28 富士
Q29 富士川
Q30 新蒲原
Q31 蒲原
Q32 由比
Q33 興津
Q34 清水
Q36 180.2km SHIZUOKA
Q37 安倍川
Q38 用宗
Q40 藤枝
Q41 島田
Q42 金谷
Q43 菊川
Q44 掛川
Q45 袋井
Q46 磐田
Q47 天竜川
Q48 257.1km HAMAMATSU
Q50 舞阪
Q51 弁天島
Q52 新居町
Q53 鷲津
Q54 新所原
Q55 愛知県 二川
Q56 293.6km TOYOHASHI
Q57 小坂井
Q58 愛知御津
Q59 三河大塚
Q62 三ヶ根
Q63 幸田
Q64 岡崎
Q65 安城
Q66 東刈谷
Q67 刈谷
Q68 大府
Q69 共和
Q70 大高
Q71 笠寺
Q72 熱田
Q73 366.0km NAGOYA
Q75 清州
Q76 稲沢
Q77 一宮
Q78 木曽川
岐阜県
Q79 岐阜
シニャー
シナイ
シネー
シン
セン
シン

図６　シン（しない）

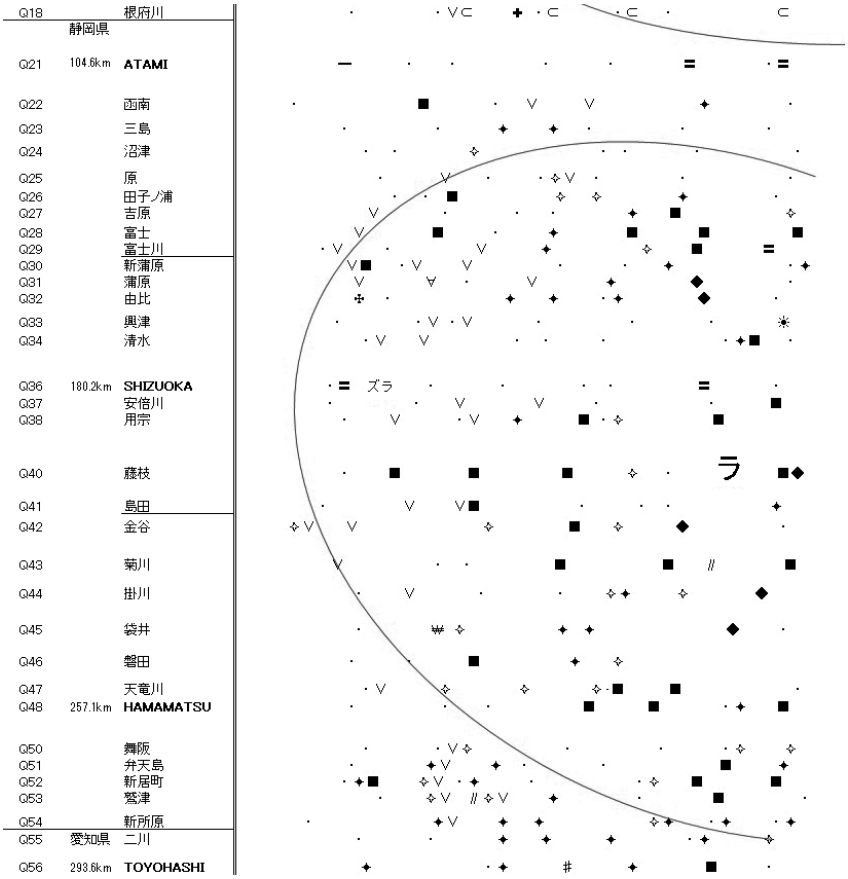

図７　アルラの拡大

スンベー　しよう

スンベー●（しよう）が沼津付近に広がり（**図８**）、さらに静岡県県東部の20代に併用の形で広がった。かつては「関東べー」として、田舎ことばとされたが、湘南から逆流の形で広がった。芸能人が広げ、コスプレの形で全国区になった（田中2011）。べは独立の要素なので使いやすいこともあり、打ちことばとしてスマホなどでも使われる。

『図説静岡県方言辞典』p.747「読もう」で、ヨムベーの分布は伊豆の沼津までなので、県内20代に拡大伝播している。

■ QG30_しよう (SIYOO)

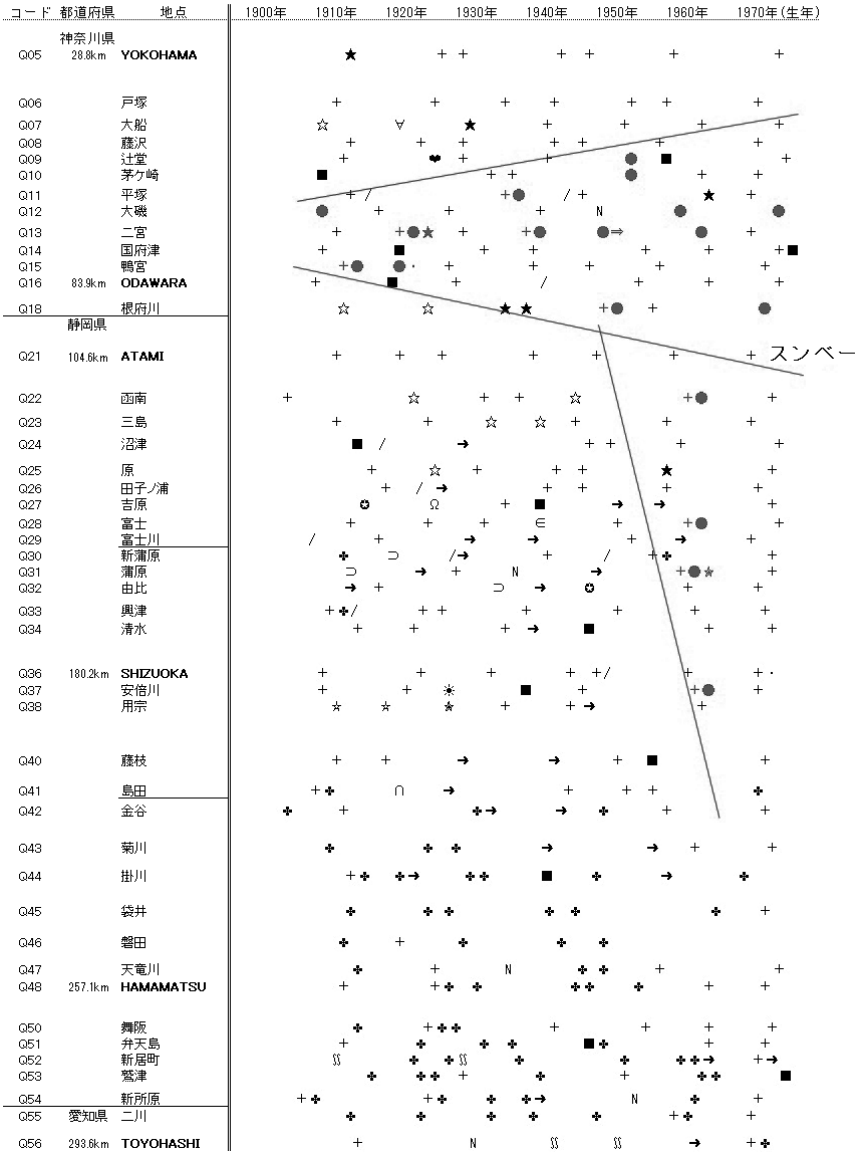

図８　スンベー

オモシロイッケ（面白かった）

「面白かった」の項目でオモシロイッケ◆が静岡市中心に地域を拡大している（**図９**）。富士川と金谷の間で、鉄道距離で13km程度に密集する。かつて過去表現で「タ」でなく「ケ」を用いた地域は静岡県に広かったと思われるが、その名残りと見られる。静岡県の「赤いっけ」などは、古語の回想の「けり」に由来する。

『図説静岡県方言辞典』p.752によれば、富士から藤枝まで（と伊豆半島南半）はオモシロイッケであり、熱海から沼津までと、菊川から新居まではオモシロカッタである。オモシロイッケの分布は若い世代で拡大している。

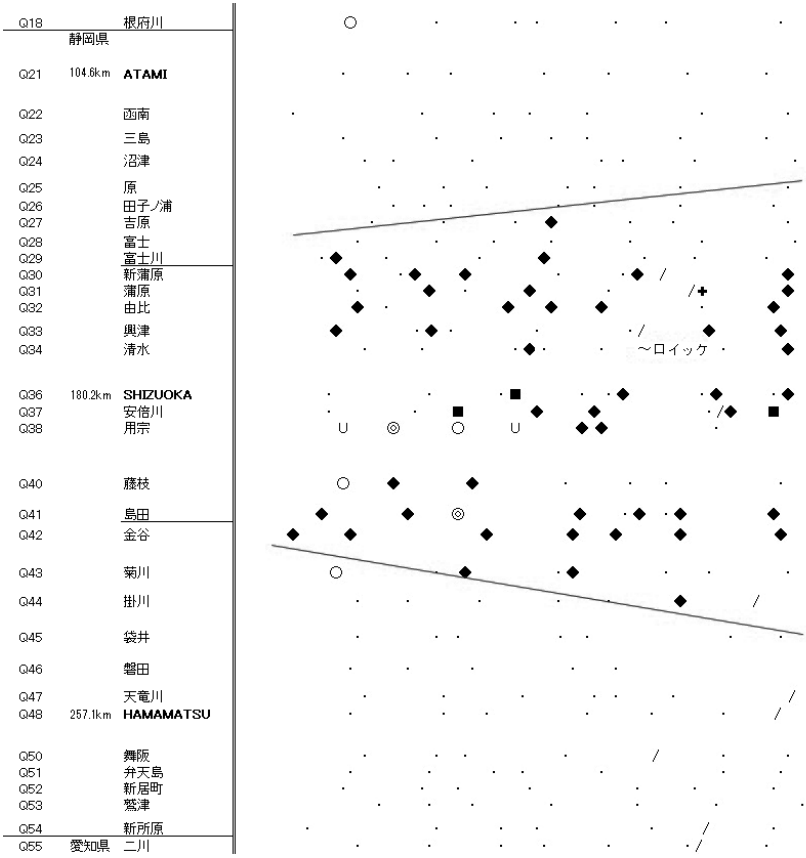

図９　オモシロイッケ（面白かった）

４．静岡県の新方言の傾向

静岡県の新方言の報告数は、他県より少ない。東海道グロットグラム調査では、関東関西の方言差を示す「気づかない方言」の項目を多く調査したが、明瞭な新方言の分布は見つからなかった。文法現象では、方言が活力を保持している。しばらくは安泰かと思われるが、追跡調査があれば、その効果が期待される。

手元のパソコンで常時更新中の『新方言辞典』のうち、静岡県に関わる項目を以下に簡略にあげる。分布地域や出典の情報を省き、ほぼ語形と用法のみを記す。多くは文法現象で、単語で確認できた例はわずかである。また大井川流域での２度の調査による高年層リアルタイムの結果も含んでおり、最新の（若い世代で増え続けている）新方言と言えないものも含む。

愛知県の新方言および気づかない方言（ビーシ、放課、ざら板、ケッタ）が静岡県に及んでいないこと、一方東京新方言は静岡県に及んでいることから、現在の静岡県は、ことば（文化）については東京圏に入ったと判断される。これは東京新方言項目の多変量解析の結果にも示されている。一方シゾーカという発音は県外に広がっているとは言えず、静岡弁としてかつて有名だった「ズラ」も他県でも使われることから、静岡弁と結び付かない。民衆の意識においては、静岡県の方言は特色が薄いと見なされている。

静岡新方言項目

アオタン　「あおあざ」
イージャン　「いいではないか」
エーッケ　「よかった」老年層はヨカッケ
エーッケラ　「よかったろう」元はヨカッツラ
ッキ　イカナイッキ「行かなかった」
オイー　「多い」
オモシロイッキ　「面白かった」大井川流域
ケ（過去のタ）　イクッケ「行くんだっけ？」(確認するとき)
　　イタッケ「いたものだ」(回想)　ゴメンケ「悪かった」
　　ミタッケ、イッタッケ（ミタッタ、イッタッタのように言っていた）
　　ナイッケ「なかった」本来はナカッケ
ゲジ、ゲジゲジ　「ゴキブリ」以前はゲンジ、ゲンジキなど
ケンケン　「片足跳び」

コー　「〜ご覧」「〜してこー」「〜してみてこー」。「ごろうじろ」の簡略化
ゴー　「〜ご覧」「〜してごー」（してごらんな）；「ごろーじ」は「ごらんじ（なされ)」から
ジャン　（豊橋や静岡県平野部のジャンは昭和初期の流行）
シン　「しない」
シズニ　「せずに、しないで」；「勉強しずにテストを受けて０点だった」
ソーッショ　「そうでしょう」「〜だったしょ」「びっくりしたしょ」「そうッショ、今日は行くッショ」「あれは島だろう」の文脈で「シマッショ」
ダケン　「だけれども」「…だけん！」
タラ　過去推量新形式。旧来のツラ
ダラ　ズラからダラに置き換わった。スズシイダラが広がった 。ラは全年齢層に使われる
〜タロ　「ただろう」中川根町で過去推量の「ツロ」が廃れ「イッタロ」
チッタ　静岡市内の男性（1928生）の自然会話で；「アッチ　イッチッタラー」「故障ン　ナッチッタヨナー」
チョー　静岡県中央部では20代の人も言う；神奈川県では10代だけ。なお静岡県中部と西部では「バカ　降った」が中年以下で使われていた。
ッチ　アタシッチ「あたしたち」オレッチ「おれたち」
ナキャダデ　イカナキャダデ「行かなければいけないから」
ナン　「いくつ、いくら、何枚、何本、何円？」
フラノーズラ　「降らないだろう」
ボックー　「いたずら小僧、やんちゃ」
ミタク　「先生みたくやってごー」
ミルイ　「柔らかい、みずみずしい」（お茶の葉の形容に、全国各地の茶業者に使われる）
モータープール　「営業用駐車場」浜松市・静岡市
モロコシ　「とうもろこし」
〜ラ　「〜だろう」「無イラ、イイラ」など　元はナカラズ、ヨカラズ；
エーラ　「いいだろう」、老年層はヨカラズ
「雨ラ」「先生ラ」「花ラ」名詞に直接付ける；以前は「花ずら」
「降るラ」「暑いラ」　動詞・形容詞にラが付く
レ命令形　着レ・見レ　静岡県でも使う
レテクダサイ　「まずは、相談に行かれてください」

レ足すことば　カケレル「書ける」、コレレル「来られる」(可能)、ノメレル「飲める」、ミレレル「見られる」(可能)、カケレナイ「書けない」
ン　「〜なさい」やさしい命令形、イキン「行きなさい」、ミリン「見なさい」
ンラ　「〜ないだろう」　旧来の「イクマイ」や「イカナカラズ」と並んで「イカンラ」

５．公共場面の方言景観

かつて方言は私的場面で音声言語として用いられるだけだったが、現代は様相を異にする。共通語化は、私的場面での共通語使用を意味する。公共圏、公的場面（矢島2017、中岡2003）でも方言が使用される。

文字言語としての使用は、言語景観・方言景観として記録・研究が盛んになったが（井上他2013)、方言音声が公的場面でも（つまり音景観soundscapeとしても）観察されるようになった。筆者の観察では、2000年前後に静岡駅付近の飲み屋街の店頭で「じゃん」を使った歌が流されていた。

静岡県における他の観察資料を掲げよう。ずら、ら、じゃんなどが多く登場する。

静岡県の方言景観と新方言

視覚的な方言景観について、戦前の情報は手元にない。出版物としては、方言撲滅の立場の書名が見つかった。中立の立場の方言記述は戦前から多く出版されており、20世紀後半には山口（1982）はじめ多数の研究書が出た。その後は娯楽タイプの書名も見られる。

方言グッズ（買える方言）としては1960年代から方言手拭いがロングセラーになっており（井上他2013)、似た方言手拭いも出されている。その定番の収録語はズラである。21世紀になって、携帯ストラップなど、１個に１語（１文）を書いた小物が色々出た。

方言グッズ（買えない方言）としての看板では、20世紀末期に県内各地で見つかる。三島焼きそばの「うみゃー」は露店などで全国各地で見られる。

方言かるたでは、文として、文法的表現の文例も得られる。なお絵はがきは会話文と見なせる貴重な資料だが（桜井2010)、静岡県では見つからない。隣の愛知県では、戦前戦後合わせて数種類出た（犬飼・成田 2010)。

方言の社会的地位を示すもう一つの手がかりは、ローマ字表記や英語との併

存であり、国際化の流れとして位置づけることができる。大阪・京都をはじめ、九州と東北（つまり方言グッズが多く、方言の情的イメージがプラスの地域）で早くから進行していたが、静岡県では今のところ観察されていない。

以下に静岡県の方言グッズを提示する。

図10　ずら　じゃん

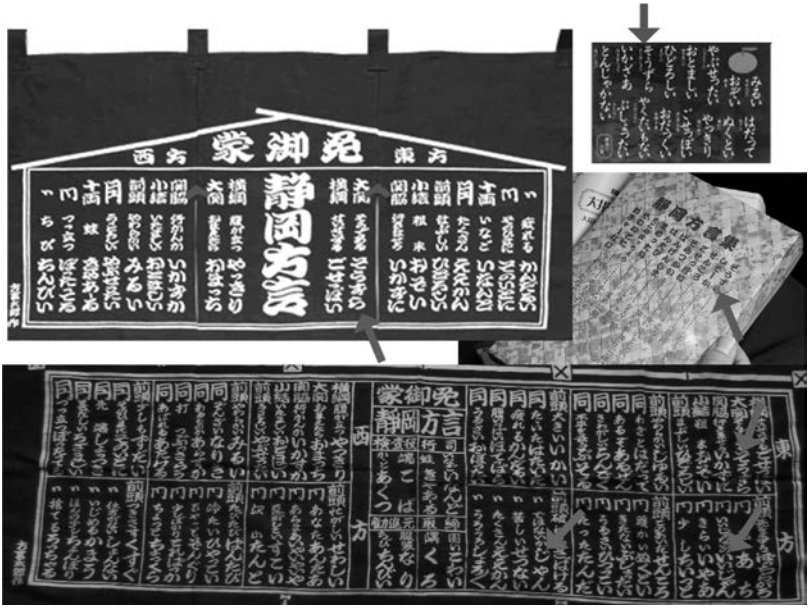

図11　ずら　じゃん

図12　じゃんねー　じゃんね

図13　いかざぁ　やらまいか

図14　てこ　ごろじ

図15　ないら　いいら　だもんで　うちっち

図16　くりょう

図17　えーら　しゃべれるらー　しゃべるずら

図18　カルタ　ずら

図19　っち　ずら

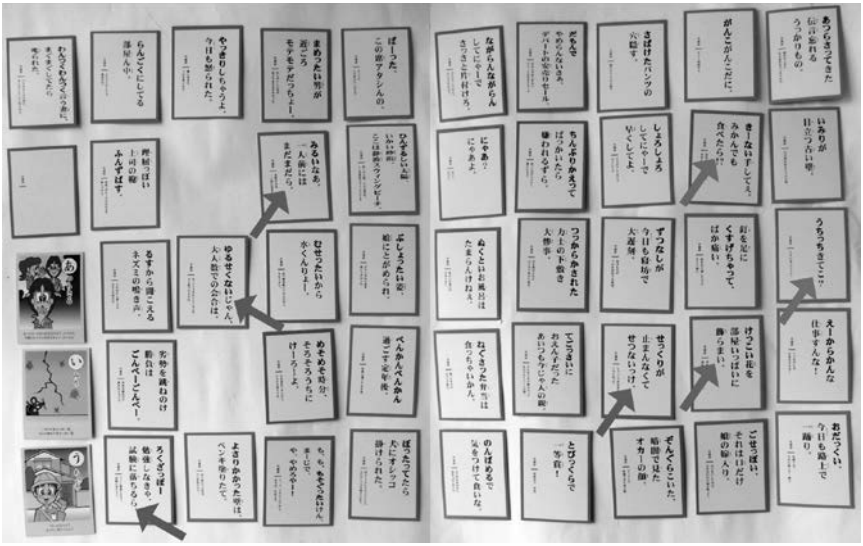

図20　ら　てこ　まい　っけ　じゃん

・ど～　　超～

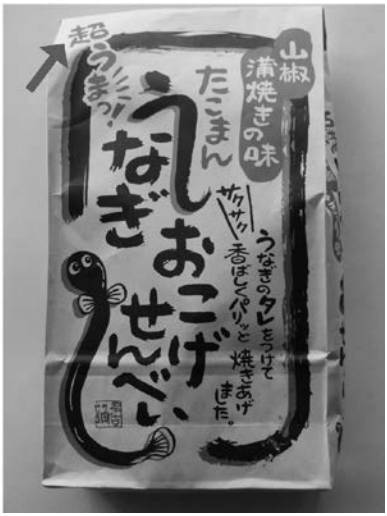

図21　ど　超

６．静岡方言の全国的位置付け

以上で静岡方言について、言語内の実体計画corpus planningに関わる部分と言語外の地位計画status planningに関わる部分を扱った。ただし方言景観に関しては、たまに訪れる者の観察は断片的であり、地元在住者が圧倒的に有利である。卒業論文のテーマにお勧めである。金沢など各地の例が参考になる（井上他2013）。新方言の分布にしても、グロットグラム調査から30年以上経っており、その後の共通語化が気になる。狭い１地域に関してだけなら、一人の内省や観察で追跡調査の役を果たせる。卒業論文でなく、レポート程度でも、重要な情報を与える。

以下では、方言グッズを出発点に、全国の方言状況を見渡し、経済的背景を論じる。

方言グッズの全国分布については、かつてグラフが作られ、東北・近畿・九州に多いことから二重カルデラに例えられた（井上2007）。2021年に、インターネットの通販サイトを使って出品された方言グッズを調べ、手頃なものを落札した。約350個の現物を並べて集計したところ、以前と様相が違う（**図22**）。近畿は相変わらず多いが、九州・沖縄が急に多くなった。以前に目立たなかった中国・四国と中部・関東が増え、東北は目立たなくなった。東京からの標準語

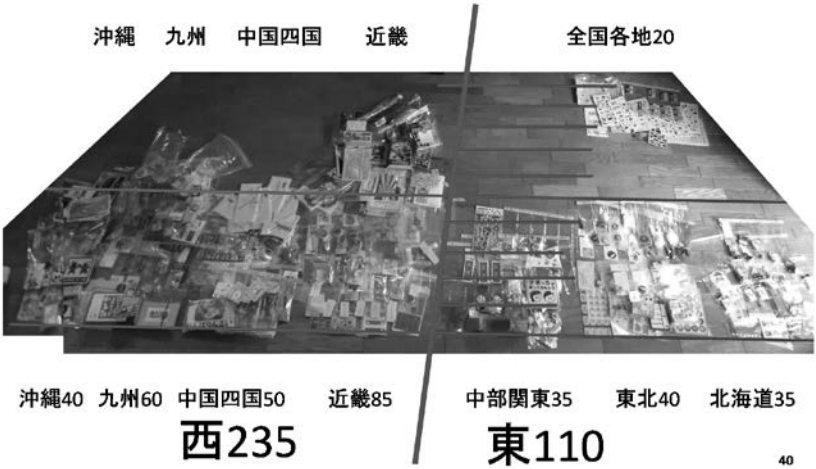

図22　方言グッズの全国分布

形拡大が、東北方言グッズの衰退に働いた可能性がある。

方言グッズの分布を支配する言語的要因としては、標準語との違いがある。手がかりとして標準語形使用率がある（**図23**）。LAJでの地域差を見よう（井上2001）。東京中心の分布を示しており、現在も基本的にはパターンが保たれている。

標準語形使用率は、LAJ全国平均では27％で、静岡県は52パーセントだった。ただしLAJは地表面積に関しては全国ほぼ一律にサンプリングしてあるが、人口構成を考慮に入れていないので、全国平均値は、全国民を代表するものではない。人口密度を考慮すると、大都市では（数平方キロ）数百万人につき数人のインフォーマント、農山村は（数平方キロ）数千人に一人のインフォーマントで、さらに生え抜きNORM（Non-mobile Old Rural Male）でない人、よそもの移住・転住者は視野の外である。つまり共通語使用に傾く人は考慮外である。静岡県の標準語使用52パーセントは、日本の縮図として、当時の（高年層）の日本全体をよりよく反映している可能性がある。

標準語形の分布

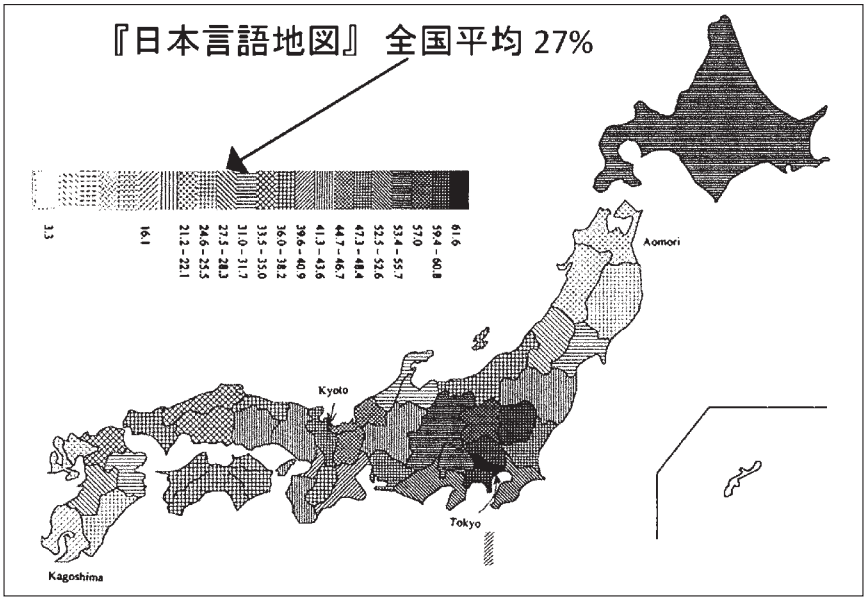

図23　標準語形使用率（静岡県52.5％）

方言と経済

方言使用と共通語化が言語外の（社会的経済的）要因に支配されていることは多くの研究で指摘されている。第１要因として、県民所得と標準語形使用率との比例関係を**図24**に示す。左下の県ではきれいに比例する。しかし両者の比例関係は因果関係ではない。標準語（方言）を話すと所得が増えるとは言えないし、所得が増えると標準語を話せるようになるとは言えない。大阪・愛知など、例外の県で分かる。静岡県は、標準語形使用率も県民所得も全国平均より上だが、近似直線の近くに位置し、全体の様子をよく反映する[4]。（ラベルの中央が数値の位置である。）

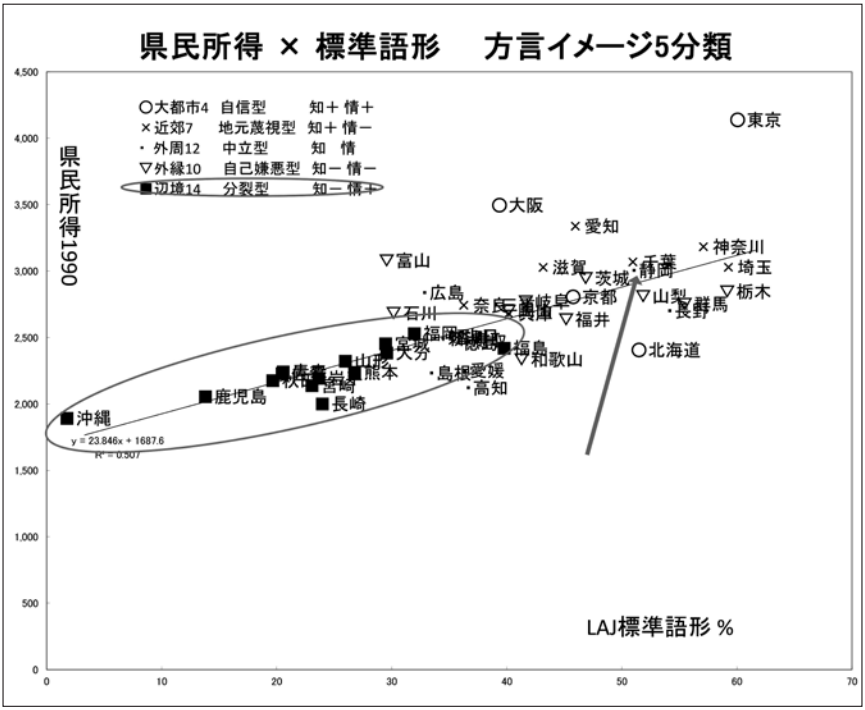

図24　標準語形使用率と県民所得の比例関係　方言イメージ５分類

[4] 原図は井上2021『ことばの格差』p105にも提示してある。

以上で見た標準語形使用率は、方言イメージを説明する。県民所得の多さは方言イメージとも関連し、経済的基盤として背景にある。**図24**にはNHK県民意識調査の結果に基づく方言イメージ４典型（特徴の薄い県を別建てした５分類）をマーカーで示した。東京中心でなく、京都中心に見ると、日本全体を周圏論的にとらえることができる。２次元の日本列島が１次元の鉄道距離によって集約され、マーカーが右上ほど白っぽく、左下ほど黒っぽく、表現されている。大都市は自信型○である。その近郊の県は地元蔑視型×、その遠方、外周の諸県は中立型・、さらに外側の外周の県は自己嫌悪型▽、外側のはずれの辺境の諸県は分裂型■と位置付けられる（井上2007，2011）。方言イメージは実態と離れたステレオタイプと位置付けられるが、古代以来の京都中心の民衆のとらえ方が根強く残ったと考えられる。

標準語形使用率は第２の要因、中心地からの距離に支配されている可能性がある。柳田国男の方言周圏論も、もし古代中世以来の畿内の人口密度、経済発展、産業発展、文化度（現在の国宝の県別の数に反映）などを地図で示していたら、説得的だったろう。

鉄道は、古代以来の交通路の継承・再現である。**図25**で横軸に1980年代の京都からの鉄道距離を取り、縦軸にLAJ標準語形使用率を示すと、西日本は鉄

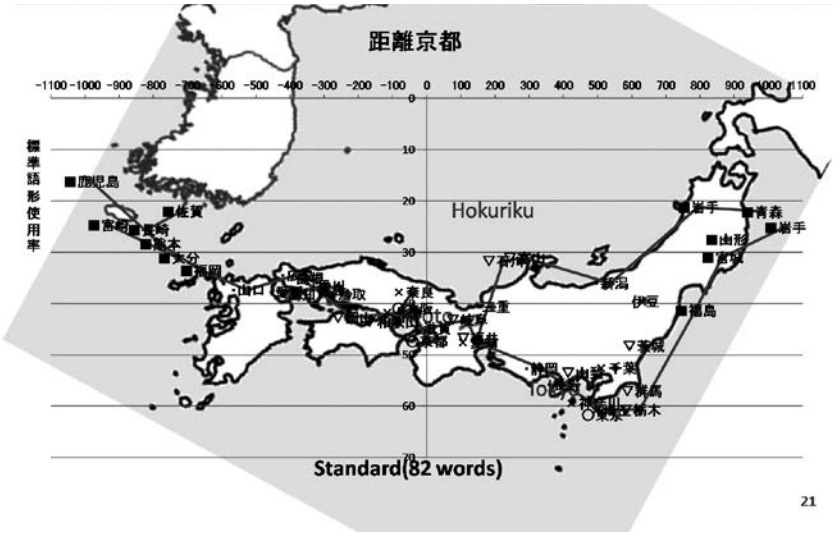

図25　標準語形使用率と京都からの鉄道距離

道距離とことばがきれいに比例する。山陰や四国のように山陽本線から離れるところも支線・連絡船の距離を算入すると比例関係を示す。九州の東側の県や長崎のような西の県も鉄道距離を考えると比例する。東日本のうち日本海縦貫線沿いの県は、大まかに見ると、(北陸を除き）西日本と線対称をなす。近代以前の京都からの伝播を示すと考えられる。これに対して太平洋側は東京を中心にもう一つの線対称を示す。近代の共通語化がかぶさったととらえられる（井上2007)。静岡県は二つの波をかぶっている。方言周圏論は再評価に値する。

まとめ　言語的コンプレックスと静岡県

方言コンプレックスはステレオタイプで（井上2007)、中世・近世以来の京都中心の都鄙（みやことひな）の対立意識が基礎にあった。そこに近代の江戸・東京の台頭が働いた。これで現代の東京中心の方言グッズの分布が説明できる。東北方言は二都から二重の差別を受けた。いわれなき差別ではない。発音も語彙も文法も対人表現・言語行動も、都・首都からかけ離れたものだった。静岡県はこの立場から言うと、古代の京都からの文化の流れと、近世以来の江戸文化も流れを受けたもので、歴史的にも日本の縮図として、日本全体の動きをよく反映している。今後のことばの動きは着目に値する。

謝辞

東海道グロットグラム調査に携わった東京外語大ゼミの学生諸君には改めて感謝する。荻野綱男、半沢康、都染直也、横山和子をはじめとする諸氏には図の作成と改訂でお世話になった。静岡大学堀博文氏には以下の講演の機会を与えていただいた。本稿は講演の一部を敷衍したものにあたる。「静岡の新方言と標準語の普及過程―静岡県は日本の縮図―」2021年7月21日。

参考文献

犬飼隆・成田道子（2010)「名古屋言葉絵葉書の書誌的研究」愛知県立大学大学院国際文化研究科
井上史雄編（1988)『東京・神奈川言語地図』東京外国語大学
井上史雄（1991)『東海道沿線方言の地域差・年齢差』東京外国語大学語学研究所

井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波新書
井上史雄（2001）『計量的方言区画』明治書院
井上史雄（2003）『日本語は年速１キロで動く』講談社現代新書
井上史雄（2007）『変わる方言　動く標準語』筑摩新書
井上史雄（2008）『社会方言学論考―新方言の基盤―』明治書院
井上史雄（2011）『経済言語学論考』明治書院
井上史雄（2021）『ことばの格差』kindle
井上史雄・半沢康（2021）「方言語彙の地域差と年齢差―庄内浜荻調査２回の多重対応分析―」『地域創造』32（2）
井上史雄・大橋敦夫・田中宣広・日高貢一郎・山下暁美（2013）『魅せる方言　地域語の底力』三省堂
楳垣実（1962）「南伊勢地方のヤンカ」三重県方言14（井上他編『日本列島方言叢書14　近畿方言考２　三重県・和歌山県』ゆまに書房所収）
江端義夫（1999）「『ジャン』の現代史」『木坂基先生退官記念論文集　日本語表現法論攷』渓水社
国立国語研究所（1966～1974）『日本言語地図（LAJ）Ⅰ～Ⅵ』大蔵省印刷局
国立国語研究所（1989～2006）『方言文法全国地図（GAJ）Ⅰ～Ⅵ』大蔵省印刷局
桜井隆（2010）「方言絵葉書について」応用言語学研究（12）
佐藤高司（1994）「北関東西部における新方言の伝播の特徴」語学と文学30
塩田雄大（2022）「ふだん“寝れない”と言う人が７割」放送研究と調査72-2
静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会（1987）『図説静岡県方言辞典』吉見書店
田中ゆかり（2011）『「方言コスプレ」の時代』岩波書店
土川正男（1948）『言語地理学』あしかび書房
都竹通年雄（1949）「日本語の方言区分けと新潟県方言」『季刊国語』3-1（馬瀬1986に再録）
中岡成文（2003）『ハーバーマス―コミュニケーション行為』講談社
服部四郎（1956）「ふるさとのことば」三重県方言３号（服部四郎1959『日本語の系統』岩波書店所収）
藤原与一（1974）『瀬戸内海言語図巻　上・下』（東京大学出版会）
文化庁国語課（2001）『国語に関する世論調査（平成13年１月調査）』文化庁国語課
馬瀬良雄（1977）「東西両方言の対立」（『岩波講座日本語11方言』岩波書店）（馬瀬1992に再録）

三田村玄龍（1905）「甲斐方言考（中の八）」風俗画報326号（明治38年）
三宅俊浩（2019）「近世後期尾張周辺方言におけるラ抜き言葉の成立」日本語の研究15-3
矢島正（2017）「「言語活動の充実」と「公共性」との関係」群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編 66
山口幸洋（1982）『方言から見た東海道』秋山書店

（要旨）

静岡県は東西日本のはざまにあり、日本の縮図と言われる。かつて東海道沿線のグロットグラムが作成されたが、その改訂版を作図することにより、地域差・年齢差が詳細に読み取れ、新方言の伝播が確認された。その実例として、ジャン（ではないか）、チョー（とても）、ッショ（でしょう）、ダラ（だろう）、アルラ（あるだろう）、シン（しない）、オモシロイッケ（面白かった）などを考察した。また、方言グッズなどにおける（広義の）言語景観にも言及し、その背景として、日本全国の共通語化や方言イメージ、さらには県民所得の相互関係を考察した。